2021年(R3年) 9月
No. 356

ひとはつうしん

(題字：中森優一)
(ホームページアドレス)http://hitoha-fukushi.com (メールアドレス)honbu@hitoha-fukushi.com

社会福祉法人 ひとは福祉会
〒739-1203
広島県安芸高田市向原町長田1857番地
TEL(0826)46-2960 FAX(0826)46-4355

暑さが大敵と思いつつ過ごしていましたら、早朝には手袋をはめてもほど良い季節になりました。

私は、50年余り知的な障がいのあるといわれている人たちと活動を共にしてきました。思い返せば懐かしい人たちが多くいます。

最近、なんと30数年も音信が途絶えていた人から突然、連絡がありました。私が似島学園高等養護部にお世話になっていた頃の人です。すでに60歳を過ぎている女性から、もう一人は50歳を過ぎた男性からです。女性からの相談は、つれあいが亡くなり、今後の生活の不安を訴える内容です。実は、30数年前には2番目の子どもを出産する際、長男を我が家で預かったことがあります。そんな縁で「またうちへ来てみたら…(困っとるんよ)」とのことでした。

男性の方は若い頃は放蕩生活を繰り返し、3度の結婚も失敗し、現在は生活保護を受給しながら、精神障がい者の作業所に通所しているとのことです。二人に共通していることは、切々と訴える孤立の淋しさです。

地域で生活するということは、地域の一員になることで、そのための支援を本人と共に創意工夫することこそ、ひとはに求められていることだと思います。

皆さんの知恵を貸してください。ぜひ機会があればお寄りください。

(理事長　寺尾 文尚)

自治会きららへインタビュー

「渡辺さん」
絵：迫田祐子

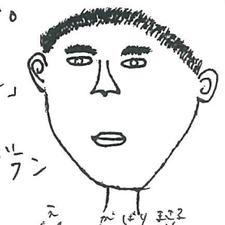
○渡辺 成子 さん

一番楽しいことは毎日のおはようを大事にすること。それと、仲間への言葉遣いを直すこと。楽しくしたいからね。

○迫田 祐子 さん

最近は、人と話ができるようになって明るくなった。お母さんが亡くなって、自分で何でもしないといけなくなって、あっぷっぷでも自分でできることはさせてもらうようにしていく中で、皆と話ができるようになった。

これからやりたいことは、ホームに入ってもっとたくさんの人と話ができるようになりたい。自分を変えたいし、自分のできることを増やしたい。


「中森さん」
絵：賀張勝

「迫田さん」
絵：渡辺成子

○中森 優一 さん

竜とそばかすの姫が観たい。神辺のフジグランで観たい。谷川さんと行きたい。

～来年の干支 販売中です～

寅の原画：松岡知哉

デザインを松岡知哉さん、粘土で形にする作業を岡部洋治郎さん、色塗りを河野大輔さんが担当。細かい所の色塗りは慎重に。一つ一つ手作り、どれ一つ同じとない。

ひとはの日々

「昭和はよかった」

ひとは館のあいす製造担当は全員昭和生まれ。時に昭和の話で盛り上がります。アニメ、歌、ドラマ…。菅田さんは次から次へと題名が出てきます。私とは10歳以上離れていますが、共通するものがたくさんあり「アラレちゃん」「GU-GUガンモ」「太陽にほえろ」「西部警察」など。「8時だヨ！全員集合」の話になると、いってみよお！といかりや長介さんの真似まで。平成、令和の流行はわからないですが、昭和を懐かしく語り合っています。

（ひとは工房　竹内 志津恵）

「継続は力なりの竹森さん」

竹森さんは、今日はかりんとう担当だとわかると、手際よく道具の準備をします。生地を作っている私に「焦らんでもええよ。落ち着いてやりんさいよ。」と気遣いの言葉を。生地ができると、さらしの布をかけて乾燥を予防し、等分に切り分ける定規の板を、と次々に自らの経験で用意していきます。「ありがとう。助かる」と伝えると「ほうじゃろう。」と満面の笑み。以前から、どうすれば仕事がやり易くなるのかを話し合って工夫していることで、相手を思い合った正確な仕事ができるようになるのだと感じる日々です。

（就労センターあっぷ　瀧野 由美子）

「なかまになった日」

ひとはで過ごした約1年5か月という期間で、一番印象に残っているのは林出さんに初めて名前を呼ばれた時じゃないかと思います。林出さんはスタッフごとに自分なりの呼び方があります。僕がひとはに来たばかりの頃は、名前を覚えられていないのか、ただ指をさしてくるだけでした。ひとはに入って2か月がたった頃でしょうか。僕の写真を指さしながら「たあたん」と言ってきたのです。最初は何のことかわかりませんでしたが、それが「たねちゃん」と呼んでくれていることに気付いたときは嬉しかったです。そこでようやく仲間の一人になれたかなあ」と実感することができました。（共同ホーム　胤森 信吾）

胤森さんは来年4月より、夢だった小学校の先生として働かれます。ひとはとの出会いが、追い風となりますように。（井上 美恵）

語り継ぎたいこと　―おーい　聴こえますか　改訂版―

ゆは いつまで 生きる人の 世話に ならんと いけんのかのう。

ひとはは、開所以来「先生」という呼称を使うことをしておりません。利用する人たちが同じように成人であること、対等の関係を築きたいこと、等の理由はあげられますが、要はその方が話しやすいと思ったからです。しかし、来訪者の中には、居合わせたきらに「〇〇先生はいる？」と尋ねる人もいました。

ある時、片山さんと過ごしていると、訪ねてきた人がつい「寺尾先生」と呼びかけてきました。すると、片山さんは不機嫌そうに「わしはいつまで先生いう人の世話にならんといけんのんかのう。」というではありませんか。“やっぱり寺尾は先生か”と思ったのかも知れません。自分が大人であることの誇りは、知的なハンディがあるとしても、当然対等の関係を持つことによって守られるものです。

片山さんの言葉に、やはりひとはには「先生」という呼称はふさわしくないんだと、改めて認識しました。

編集後記

雨の日。駐車場からひとはまでの距離を歩いていると、滑ってこけてしまった。ホームのドライヤーを借りて服を乾かしている時、渡辺成子さんが覗きに。事情を話すと納得してその場を立ち去る。昼食時に出会うと、「乾いた？」と声をかけられた。何事もないやりとりの上で、その一言が、その思いやりが、心に残る。

（竹内 宏美）